春から初夏にかけての里山の情景はめまぐるしく変化する。木々の芽吹きからはじまり、スミレやシュンラン、マムシグサなど多様な草花の開花が続く。互いの体内時計を働かせながら順序正しく咲き、決して乱れることはない。営々と築いてきた自然界の規律がしっかりと引き継がれているということか。どこかの世界のように、我先にと押しのけていくようなことは決してなさそうだ。

子どもたちに『自然環境体験学習』の場をと、整備を進めている北区山田町の里山に、今年も春が訪れた。木々の営みと同じく、ここに棲む昆虫たちもしっかり成長してきた。昨年の活動で、間伐や林床整備の合間に枯葉や朽木を盛り上げ、彼らの棲み家を作ってきた。棲みついてくれる約束はなかったが、里山の植生や生態系がしっかり残るこの里山から、今年は 80 匹ほどのカブトムシが育ってくれた。希望する市内の小学校に贈りたい。何よりの自然環境学習の生きた教材として、多くのことを学び取ってくれることだろう。カブトムシの一生はホタルやスズムシ同様 1 年で世代交代をする虫たち。生きた教材をしっかり育て、来年の世代へつながる飼育をしてくれることを願いながら、この生きた教材に大きな使命を託していこう。子どもたちも、きっと目をきらきら輝かせながら、しっかり彼らの使命を受け止めてくれることを信じて。

(ひしのみ 130 号　写真と文　菅田 忠志)